

令和元年度第4回 市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議 会議録

日 時 令和2年2月7日（金） 10：00～11：50

場 所 姫路市市民会館 5階 第11会議室

出席者 7名 事務局5名
藤本 真里（座長） 米谷 啓和 大塚 優子 安積 英孝
川石 雅代 橋 正人 福永 強

（事務局） 市民参画部 平石部長 市民活動推進課 藤保課長
市民活動・ボランティアサポートセンター 佃所長 岸本主任 田代主任

次 第

1 開会

2 議事

（1）2020年度事業計画について

報告事項

（1）第8回ひめじおんまつりについて

（2）開設10周年記念フォーラムアンケート結果について

（3）夏休みボランティア体験アンケート結果について

3 閉会

会議の進行記録（要点記載）

事務局： 資料1 2020年度事業計画について
説明

参加者： この場での議論ではないかもしれないが、姫路の中心市街地のことはセンターだが、周辺地域では公民館がその機能の代替をしている。そこがヒト・モノ・カネいろんな面で充実していないので、サポートが大事かと思う。

座長： 拠点になっているセンターと公民館が何か連携できるのではという面で関連するかと思う。公民館から見てどんなサポートがあると良いと思うか。

参加者： 公民館にセンターからの情報提供があれば良いと思う。合併で昔の村長や、議会がなくなってから、ある意味公民館はその代替機能があると思う。相談ごとなど集まってそこで話しているが、本来、公民館は住民の教育や文化振興などが目的で、市民活動ではない。しかし、小さな地域の拠点は公民館だと私達は考えている。

座長： 今は公民館や市民センターといった拠点では、従来の社会教育的なことだけでなくまちづくり的なこともやろうという流れになっていると認識しており、姫路市もそういう方向性ではないかと思う。

参加者： 公民館を市民局が所管するという方向にあると聞いた。

事務局： 市民局が公民館を所管するというのは決定ではないが、それも含めて検討していくことになっている。今、センターと公民館とのつながりは直接的にはないかもしれないが、センターの通信を送るなど常に情報提供をしているので、地域住民の方にも公民館に来てもらえれば見ていただける。

事務局： 公民館を利用されている登録団体もおられる。

参加者： 公民館長からセンターへの問い合わせ、情報提供、依頼などはどんなものがあるか。

事務局： 公民館におけるボランティア募集について、通信への掲載依頼がくる。例えば公民館の清掃や講座の手伝いが必要といった内容である。

参加者： もう少し何か連携があってもいいのかと思う。

参加者： 教育委員会関係と市民局というのはベースが違うので、そういうことが起こる。以前から、横の連携を早く組むべきと言っており、少し良くなりつつあると思うが、体制そのものをもう少し市民寄りの考え方にしていくと、そういったことも解消できるのではと思う。

参加者： もともと公民館は住民の教育が目的でできている。そこへ拠点の機能という考えも合わさってきてはいるが、コピーを使うにも、部屋を借りるにも、利用料がいる。そうなると、喫茶店でも行って話そうとなる。

事務局： 基本的にはどなたも使用料が必要であるが、逆にセンターの登録団体や、社協関係の会合などの場合は一定の減免があり、利用する団体から見ると、地域でも使いやすいような形にはしている。そういった意味での横の連携はある。

参加者： 確かに登録したら減免はあるが、住民のほとんどはしていない。

座 長： センターというより課の方かもしれないが、計画の中の地域の協働の推進というところで直結している話かと思うが、ここでいう推進のための場づくりというのはどこを捉えるのか。

事務局： 各地域、様々な課題がある中で、地域の自治会や子供会や様々な団体と NPO やボランティア団体との協働、それを行政がどう繋いでいくかというところの推進と捉えていただきたい。

座 長： モデル事業をやってるという話もあったと思うが。

事務局： 今、実証実験ということで3地区において進めている。

座 長： その先に、公民館をもっと地域で活用できるように変えていこうとかそういう話も将来的には入っているのか。

事務局： そのあたりも視野に入れての検討ということである。

座 長： 姫路は、大きな都市ではあるが、自治会が強いというのが特徴だと思う。一方で

市民活動も活発なので、今後の協働のあり方がいいモデルになる可能性もある。センターにおいても市民活動だけでなく地縁組織も重要になってきて、自治会も非常に重要なターゲットになるのではないかと思う。

参加者： 今年度の事業計画で PDCA サイクルの D が済んで、C のチェックのタイミングが次年度の会議になるなら、その時期は 2020 年度の P のプランの部分にもあたる。12月までの暫定でも振り返りがいるのでは。

座長： 進捗状況は前回会議でしているが、議論しやすいように、前回資料も出してもらえたら良い。

参加者： 前もって資料があると、議論しやすい。

事務局： 直前になるかもしれないが、事前に資料を送るようにしたい。

参加者： 事業計画において、前年度の事業を振り返り、どういうところが課題としてあがったのか。

事務局： 前回の会議の際にアンケートの分析が大事だという意見をいただいた。後ほど今年度取り組んだ開設10周年記念フォーラムや、夏休みボランティア体験などについてのアンケート結果の分析で課題も報告したい。

参加者： センターの役に立ちたいので、悩みなどがあれば相談してほしい。

座長： センターもそれなりに時間がたって軌道に乗っているので、ルーティンになりがちで資料からは苦労や悩みが読み取れない。もちろんこういった資料は公文書として残るので、そこに盛り込むのは難しいとは思いますが、本会議はセンターをサポートするためのものと思っているので、議題が終わった後少し時間をとりたい。

参加者： この事業計画というのが、事業項目であって計画になっていないからそういう話になる。

事務局： まだ予算が確定していないので、概略的な対応になっている。新年度の1回目で詳細な事業計画を出す。

参加者： 計画の2番の人材育成、学習機会の提供のところ、講座については時期や内容

が決まっているのか。

事務局： 時期は6月から随時実施するが、内容は未確定である。

参加者： 6月から始めるならば、講師の手配や広報もあるので、そろそろ内容を絞っておいたほうが良いのではないか。

座長： 確かに少し遅いと思う。事務局は基本的な流れを見直してみてもどうか。

参加者： 10周年記念事業のフォーラムのフィードバックをして、その結果をこの事業計画の中でしっかりつなげてほしい。計画を見て例年どおりのことを充実させることは分かったが、この10年で苦労したことをどう反映していくのかを見て、私達も何か提案したいと思った。

事務局： 資料2 第8回ひめじおんまつりについて
説明

参加者： クイズラリーが盛況だった。実行委員としての課題は、ステージと展示が異質なので融合できれば良いが、会場の都合で動線が難しい。あとは、ステージの動員人数が少なく800人収容のところに20人、30人という観客が実態なので、そこが課題である。参加団体のメンバーに子供がいる時は観客も増え、その方たちは展示ブースも回ってくれるので良いが、全体の観客も第1回目のひめじおんまつりに比べてだんだん減っている。

参加者： 良かった点は、参加団体の説明会でスタンプラリーからクイズラリーに変更する説明をした時、苦情が一切出なかったことがありがたかった。参加団体もみんなとコミュニケーションをとって、何か一緒にやりたいという思いがあったのかなと思う。入場者数は減ったかもしれないが、中身の濃いまつりになったと思う。

参加者： 内容的には交流が深まったが、ステージ系が阻害されている感がある。ステージ団体はクイズの出題ができないので、ブースを作って出演後にそこにパンフレットなどを置いて残ってほしいと依頼したが、終わったらすぐに帰る。次年度に向けて、参加団体にブース1つを設けて残ってもらうという案も出たがキャパの都合で難しい。だから、5団体くらいで1つブースを作るとか。彼らも後継者の育成という課題を解消するのに、参加者を募集するいい機会ではあると思うが、団体の考えもいろいろでなかなか一律にはいかない。

参加者： 協力ボランティアの募集について、企業に呼びかけたらいいのではないかと。以前勤めていた会社にボランティアがほしいと相談したら、3人か5人ほどが来てくれて、その後も、その中の1人か2人がずっとやってくれている。企業も理解をしてくれているという大きなメリットがあるし、個人への呼びかけは難しいので。そういう意味で企業を利用したらどうか。

事務局： それについては、事務局も同意見で、人数が足らなければ個別に企業にアプローチをお願いすることも考えていた。

参加者： 実際アプローチしたことがあるが、同じ時期に姫路城マラソンのボランティアがあり動員がかかるのでと、断られた。もちろん広く募集してもいいとは思いますが、趣旨的には運営に力を入れたいので、その意見はボツにしてほしい。

参加者： この8番の協力ボランティアとは、そういう意味ではないのか。

参加者： これは、今までにお願いしてやってくれた人たちが来てくれている。学校関係はセンターや我々でアプローチして広げていっている。企業に来てもらうのもいいが、若い世代を広げたいというのが、基本的な方向と思っている。

参加者： 企業の中にはボランティア休暇というような仕組みもある。

参加者： それを主目的にやっているのではない。そこに力を入れてしまうと方向が違う。

座長： このまつりは、市民活動をしているセンターの登録団体が主体で、市役所ではない。だから、運営も市役所のスタッフではなく、実行委員が行う。ボランティアは不要というわけではないが、実行委員も忙しいのでできるだけ効率的に時間を使いたい。企業にボランティアを頼むということに時間をかける余裕がないということだ。かといって市役所が代わりにするというのは違う。自分たちで交流の場を作りたいという思いで始めたものなので、自分たちですることに意義がある。

参加者： ここに書いてある協力団体は、どういうことなのか？

座長： この協力団体の方々は、まつりの趣旨に賛同して組織ごとに来てくれている。

参加者： このまつり自体への参加団体として、子供たちの送迎をしている人たちや子供た

ちの見守り隊などかどうか。素晴らしい活動をしていると思うが、そういう団体の参加はどうか。

参加者： 地域単位での活動ということになるのだろうが、それをきっかけに広域でやろうという思いを持って個人ボランティアとして活動していただくと助かる。

座長： その方達が、どんな活動であっても、登録したいとかみんなに活動を PR したいということであれば、ぜひ参加してもらったらよい。ただ、そういう人たちがそれを求めているかどうか。それがあるかないかの差ではないか。

事務局： 資料3 開設10周年記念フォーラムアンケート結果について
説明

参加者： 自由意見にあるが、このセンターは近隣にはなくて姫路市独自のものなので、ここに行けばいろいろ相談や、話ができるということを周知することが必要だと思う。その広報をいかにしていくかが課題ではないか。

参加者： 分析で、若い人が少ないとあるが、自分自身のその頃を振り返ると、逆に30代、40代の方がよくこれだけ参加してくれたんだという驚きのほうが大きい。若い人に関心を持って参加してほしいというのは歳をとってからつくづく思うことである。しかし災害があったときの一時的なボランティアなら参加してもらえが、若い人が恒常的にボランティア活動をやっていくというのはなかなか難しいと思う。

事務局： 代表的な自由意見としては「フォーラムに参加できて、とても有意義でした。センターで実際どのような活動をしているかは知らなかったので、少し理解できたような気がします。」「ボランティア活動をテレビで見て、自分にはできないことはないと思いついていたと思います。どのような形であれ、自分にできることを考える機会を与えていただいたと思います。」あとは「ボランティア活動の縦のつながり、横の連携の難しさ、人材確保の難しさ、公的なボランティアとのつながりなど、課題がたくさんあることがわかりました。」などがあつた。

座長： 重要なところは、今後どのようにこれをつなげていくかということだが、その課題としては若年層の開拓、センター自体の PR やこういった事業、市民活動の周知などがあげられる。

- 参加者： この分析結果を2020年度や、次の10年の中期計画には反映するのか。
- 事務局： センターだけの独立した計画ではないが、センターのことも含めて、来年度、市民活動協働・推進事業計画の見直し、第4次の計画の策定を進めていく。
- 参加者： 第4次を受けて、センターだけの中期計画は必要だと思う。清元市長の基調講演とパネルディスカッションで出た様々な意見を、きちんと次年度の事業計画や取り組みに紐付けていくことが必要。PDCAでいくと、チェックがかかって次のアクションになるが、それを2020年度の事業計画や、今後の中期計画に反映することが大事だと思う。今回はひめじおんまつりが終わったばかりで、間に合っていないかと思うので、今後、この会議の日程を調整しないといけないように思う。
- 座長： パネルディスカッションでの意見が非常に充実していたようであるが、これをすべてやるべきということではなく、これを整理して、しっかりと検討の素材にするということが大事だと思う。若い世代の開拓やその世代への周知というのはよく課題として出てくるので、何か具体的にすべきである。
- 参加者： 若い世代の参画は、2020年度事業計画の中のどこにあたるのか。
- 事務局： 「はじめのイッポ」などの人材育成、学習の機会の提供にあたる。次世代の担い手づくりという部分である。フォーラムで、基調講演の市長やパネルディスカッションのパネリストの方々の年齢層が比較的高かったので、観客も若い人は少なかった。若い人が来て話を聞いてきっかけづくりになれば良いとは思ったが、内容的にも比較的若い人向けではなかったかもしれない。
- 事務局： 人材育成、学習機会の提供というところで、「はじめのイッポ」や「夏のボランティア体験」など学生を中心にPRしてボランティアを体験してもらおうというところで、きっかけづくりをしている。
- 参加者： 私の認識と違いがある。センターの取り組みは重要だが、まちづくりなど様々な活動をしている若い人たちに、その情報が届いていない気がする。若い人たちのネットワークの作り方はNPO法人を作るとかいうことでなく、何かテーマがあったらSNSの世界ですぐ集まって活動し、そこから派生して新しい動きが始まってというような形態である。そういう意味では情報の発信の仕方や声の掛け方や施設の利用の形態なども、根本的に見直すいいチャンスかと思う。若い人たちは、地域やNPO的なものや自分たちの興味のある活動をたくさんしているが、

こちらの認識とズレがでてきているのではないか。もしかしたら、支援などは必要ない、自分たちが思うよう活動するほうが動きやすいということかもしれない。それらを考慮してパネルディスカッションやアンケートの結果とかその属性の分析をやっておかないと、時代にそぐわないと思う。

事務局： 運営会議のメンバーにも、若い方が入ると違ってくると思う。

座長： 周知というところは、永遠の課題だと思うが、若い人への拡がりについては、まず若い人の意見を聞くべき。この会議は日中にやっているのに、若い人の参加は不可能である。だから、こちらから出かけて行って、真剣に聞いて、良いと思ったことは実践する、その姿勢が大事だと思う。

参加者： 学生の個人ボランティアというのは勝手にやっているのに、数字にあがっていないが、実際は結構いると思う。市に考えていただきたいことがあるが、例えば地域創生カフェのような事業をしても、日中の開催なので、大学に依頼があつて来てほしいと言われても行けない。例えば夕方以降に開催するなど、学生の目線に立って企画していただきたい。プラス、バイトをしているのでシフトの都合で行けないという学生も多いので、1ヶ月以上前もって言わないと、動けないという傾向がある。

座長： 参加依頼は2ヶ月前がよい。行政がからむと煩雑な書類作成や活動を制限されるので、行政をあてにしていない若い人も多いと思う。そういう状況を、行政はどう捉えるのか。若い人たちは自由に活動してもらって、違う世代を支援するのに力を入れるのか、あるいは、若い人たちを応援すべき手法がまだ何かあると考えるのか。まずは実態把握が必要である。

参加者： 「自称姫路市長」や「創生カフェ」の意見の結果を見て、おそらく若い方が多いと思うが、本格的なアイデアから思いつきのような面白いアイデアまで溢れていた。そういうところからも情報を拾ってこの事業計画を立てたら、より実態に沿うというか、サービスとしてよりの確なものになる気がした。

座長： 姫路市の総合計画を策定している関係で情報を見たが、中学生の意見も調べてみる価値があると思う。なにか参考になる糸口があるかもしれない。

事務局： 資料4 夏休みボランティア体験アンケート結果について
説明

参加者： この分析で今後の対応もわかってきたので、来年度の事業の質が上がってくるのではないかと思う。私達もこれを共有できたら、男性の比率が落ちてるいから知り合いに声をかけてみようといった判断もできるので、大変ありがたい。

座長： この事業はいろいろなひろがりがあると思う。若い人が体験することで、そのグループと交流し、グループの方も活性化して、今まで全然関わっていなかった人たちとのいい関係性ができて、そこからいろんな波及効果が生まれる。

参加者： うちの団体は、医療の専門学校の生徒を受け入れた。なぜここに来たのか尋ねると、小児科の関係にいくかもしれないからと言うことで、手作り絵本の手伝いをしてもらった。直接的に仕事に関係はしないが、経験しておいたらお世話する子供たちや大人の方に見せる機会があるかもしれないということだった。反省点としては地図などを添えていなかったのも、違う場所に行ってしまう、タクシーでこちらに来たらしいので、次回は、気をつけようと思った。あとは、取材に来たセンターのスタッフに活動を見てもらえたことは良かった。この事業は、中学生が参加するトライやる・ウィークの、その後半戦というようなものと捉えてもらったら良いと思う。

座長： いろいろなところから、とても良い事業だという声をいただいております、今、センターが持っている課題も解決できる可能性もあるので、例えばこの事業の予算を増やしてもっと工夫するとか、トライやるよりもさらに受け入れやすいような何かを考えるなど、なお一層ブラッシュアップできれば良いと思う。

参加者： 整理するのにSDGsの考え方を取り入れてはどうかと思う。これは2015年に国連のサミットで決められた持続可能な開発目標で、様々な市民団体の活動と密接につながっており、世界共通の物差しとして様々な分野の方々となつなっていくツールだと思う。地域や、経済、人々の生活、教育など、発展もしつつ持続可能な方向に切り替えなければいけない時期にきていると思うので、市民活動とSDGsという観点がないならば、是非ひめじおんの活動の中にも取り入れてはと思う。これは新総計でも柱の一つになっていると聞いているので、連動する形になっていくと思う。

座長： 新総合計画の策定時にもそういう意見は出ていたが、まだ対応できていないという市の回答だった。しかし、今から必須の考え方であり、その考えをもとに業務を整理していくと、企業もだが公共施設も深く関係していると気づく。その尺度で動いている企業もあるので、そういうマークを事業計画などに入れてアピール

するとそこからつながる企業がでてくるかもしれない。

事務局： 内閣府が行った県と市区町村へのインターネット調査において、全部で1788ある団体のうちSDGsに向けた取り組みを何らかの形で推進していると答えたところが241団体、割合にしたらまだ13.4%にとどまっているという結果で、自治体においてもまだ手探りの状態である。本市では総合計画の中に地方創生の戦略という独立した計画があるが、新総計ではその地方創生も織り込んだ形で作っていくということで、何らかの形でSDGsの取り組みも盛り込んでいきたいと担当職員から聞いている。そういったものを情報収集しながら、どういった形で取り組んでいけるのか、盛り込んでいけるのかを考えていきたい。

座長： それでは、今年度最後の会議をこのあたりで閉会としたい。次回の会議の開催について開催時期について事務局より提案いただきたい。

事務局： 次回の開催について日程調整

5月で調整